

# 中世日本文学における舍利信仰

Brian O. Ruppert

仏教の開祖である釈迦は荼毘に付された後遺骨を残し、それは舍利と呼ばれ、釈迦信仰の一つとなりインドから日本にまで広まりました。ですから、舍利やそれに関連する塔という用語は仏教文学や他の記述において独特な意味を持っているのです。例えば、仏教文学のジャンルの一つで、釈迦の前世を描いている「本生譚」は舍利（及び塔）信仰と直接に結びついていると思われます。

今日は日本中世文学上に見られる舍利記述を検討し、その意味を考察したいと思っております。中世文学の基になるものは主に古代アジア文化や古代日本の文献ですから、それらの舍利記述についてまず検討してみたいと思います。つまり本生譚等の文学を読み解く事によって、舎利の供養、安置、分配等に関する記述が何を意味するのかを理解でき、舍利が日本文学において、どのような意義を持っていたのか、或いは中世前期の社会にどのような意味があったかを分析できるのではないのでしょうか。

## アジア・東アジアにおける舍利信仰

アジアの仏教では紀元前2世紀・1世紀に建立された仏舍利塔に釈迦の生涯、舎利の分配、又は釈迦の前世（本生）が描かれています<sup>①</sup>。その主なモチーフは釈迦の前世に菩薩行として行った布施についてです。釈迦の布施のテーマは二つあり、一つは菩薩が行う中でも究極的な布施として知られる、捨身行という命を捧げる行為です。これは日本を含め、東アジアでよく知られている二つの有名な本生譚に描かれています。例えば、『大智度論』<sup>②</sup>や教典には尸毘王の鳥

に対する捨身行が描写されており、又、『金光明最勝王經』などは摩訶薩埵王子の虎への捨身行を描いています。しかも、『最勝王經』では、釈迦はその前世に捨てた身から残された舍利と安置した塔を弟子に見せ、仏教徒にとってはこの捨身行をした仏陀が最高の福田（布施の対象）であると説法しているのです<sup>③</sup>。この話は塔・舍利塔は供養によって得られる功德と釈迦が行った究極の布施が繋がっている聖なる場であることを想起させ、信者に強い感銘を与えたと思われる。稀に他の菩薩の捨身行も描写されています。例えば、『法華経薬王菩薩本事品』には薬王菩薩が前世喜見菩薩として日月淨明德仏の前で捨身し、又、日月淨明德仏の摩訶涅槃後、その仏舍利を84,000の塔に安置させたという記述がありますが、このように薬王菩薩の仏陀・仏舍利塔に対する捨身も描かれていたのです。

修辭学的に見れば、このような話は信者が塔を建立したり、宝物や捨身行を供える（布施をする）ことによって、釈迦の前世の捨身行に報恩する事ができるのだ、という叙事的論理・モチーフを表現していると考えられます。

もう一つのテーマはその本生譚に描かれている菩薩が大方王や王子であった、という点にあります。後の仏教文学には本生譚の中で菩薩の恩とみなされた捨身行に対して、阿育王や他の仏教徒であった王侯貴族が究極的な布施に準じるとされる行為、例えば莫大な宝物を供えるという布施行為、あるいはその動機がよく描写されています<sup>④</sup>。しかし、阿育王や東アジアの王侯貴族は釈迦の布施という行動を真似するだけではなく、釈迦の捨身行に対して報恩するという動機もありました。つまり仏舍利に対する供養や塔の建立等の布施は釈迦の布施のミメーシス（擬態）であり、同時に釈迦の布施に対する報恩の儀式でもあったように表現されています。

このように仏教文学等の中で「舍利」に関する記述を検討してみると、「舍利」が釈迦の遺骨という以外に、別の意味を含んでいたこと、つまり古代や中世日本の貴族社会が舎利の多面性を認識していたことが分かります。例えば『日本書紀』には、司馬達等が仏舍利を発見し、その靈験を認識していたこと

が記されています<sup>⑤</sup>。この話は、中国の仏教文学にも見出されるので、その影響の大きさがよく理解できるでしょう<sup>⑥</sup>。つまり、東アジア人にとって仏舍利は信者の「如意」、つまり願いを叶えるパワーを持つ事が日本古代文学の中で描かれているのです。

### 古代日本の文学と舍利

日本古代の皇室やその周辺の人々は舍利と捨身行の深い繋がりを意識していたと思われます。例えば、法隆寺の玉虫の厨子には舍利供養と本生の釈迦の捨身が描かれています。又、伝記や説話、往生伝などのジャンルには舍利についての記述が特によく見られます。例えば伝記の場合、聖人伝であるので、善行が中心にされますが、それに限らず聖人は仏や菩薩に近い存在であるという事が描かれています。その時に仏舍利が釈迦や菩薩の象徴として現されているのです。例えば、『太子伝古本目録抄』には、聖徳太子が二歳の時、手に白色の仏舍利を持っていたことが描かれています<sup>⑦</sup>。このように、遅くとも中世前期までに、太子と釈迦との深い関係が暗示されているのです。また、高僧伝には七世紀から中国に巡礼した日本の僧侶がしばしば舍利を日本に請来する(持帰る)事が描かれています。例えば、道昭(629-700)伝には、道昭は玄奘から舍利や経論を授かったと述べられています<sup>⑧</sup>。そして道昭以降、舎利の請来を記録した伝記や史料は徐々に増えてくるのです。例えば『唐大和上東征伝』には鑑真(687-763)の請来した三千粒の舍利について描写されています<sup>⑨</sup>。また、天台宗の円仁はその『巡礼行記』に仏舍利や塔の信仰をについて記し、後にその伝記に日本に舍利を請来し、舎利会を比叡山で始めた事を書き残しています。

真言宗の開祖空海は仏舍利80粒だけではなく、舎利や塔の供養を描写したお経も中国から持ち帰ったことが知られています<sup>⑩</sup>。空海の遺言や伝記にその舎利の由来や供養の意味が記されています。特に10世紀に成立したと思われる『二十五ヶ条御遺告』第14には空海の造った後七日御修法という大内裏の儀礼の特性に少し触れ、佛舍利が重要な供養の対象であった事が強調されています<sup>⑪</sup>。し

かも、東寺の長者が担当であった事が描かれています<sup>12)</sup>つまり、『御遺告』には、後七日御修法は御齋会や他の修法と違い、宮中の年中行事化された儀礼としては唯一宗派で守って行くべきものであると書かれています<sup>13)</sup>その佛舍利は朝廷のタカラモノ、というよりも、真言密教の宝物として新年に玉体安穩・宝祚無窮・鎮護国家・五穀豊穰を祈願し、成就されると考えられていたのです。また、『御遺告』には仏舎利を32粒<sup>14)</sup>と金・銀などの財宝と混合すれば、「能作性」如意宝珠を作ることができることが強調されています<sup>15)</sup>。こうして、舎利は釈迦の遺骨でありながら、空海が持ち帰ったことにより、弘法大師信仰<sup>16)</sup>にも繋がり、宗派内部では真言密教の伝法一聖なる流一を象徴する宝珠ともなったのです。

### 中世日本の文学と舍利

こうして古代から中世にかけて聖徳太子伝や高僧伝・遺言の中ではそれぞれが仏舎利と深い関りを持っていた事が描かれています。これは在家や出家に対しては、仏教の説法を現すものとして、又出家側からは、宗教的な権威を象徴するものとして仏舎利が用いられていたと言えるのではないのでしょうか。

しかし、仏舎利の文学上の意味は決して太子伝や高僧伝や遺言に限られていませんでした。説話にも仏舎利や塔を描写した記述が頻繁に見られました。例えば、『日本霊異記』（中巻第31）には、塔を建立する事を祈願した近江の人には、左手を握った女の子が生まれました。七歳になり、手を開いた所、舎利二粒あり、それを父親が作った塔に安置するとすぐ女の子は亡くなりました。つまり、女の子は菩薩の化身として父の祈願を満たす為に生まれたのです、また舎利の霊験はその存在だけではなく、父の信心を具現化しています。このように説話にも、高僧や菩薩や仏の化身と舎利霊験の関連が描かれているのです。

10世紀後半の『三宝絵詞』には本生譚の捨身行やその後の仏舎利塔の建立について描き、教典上の仏舎利記事を引用し、比叡山の舎利会など現地の仏舎利供養活動を記しています。源為憲が尊子内親王のために書いたこの説話集は出

家の功德を強調しながら釈迦の捨身や布施をもよく描き、それを真似ることによって報恩の功德が得られることを強調しています。上巻「仏法」の序文は釈迦が前世に衆生のために至る所で捨身したという話で始まり、「檀波羅蜜」という最初の章では尸毘王の捨身が最高の布施であると語っています。又、本生譚の後半の章で見られる二つの話の中では、捨身した獅子や魔訶薩埵王子の遺骨を王が塔に安置し、供養している様子を描いています<sup>⑦</sup>。

1040年代に成立した、天台僧鎮源の『法華驗記』には法華經持經者の無名沙門（巻上第15）が捨身（焼身）し、後にその弟子が墓所を尋ねて見た時のようすを次のように描いています。

有仏舍利。発奇怪心。拊捨舍利。量過一升。普施一切。令得供養矣<sup>⑧</sup>。

つまり、この沙門は単なる人間ではなく、法華經のなかで捨身した喜見菩薩の生まれ変わりとして描かれているのです。ここで又、『三宝絵詞』と同様に、平安中期には、舍利信仰と捨身行の関連が知られていた事が見受けられるのです。

『日本靈異記』や『三宝絵詞』にみられる舎利の描写はそれぞれ庶民や貴族に対して書かれたと考えられますので、平安時代までに舍利信仰は社会に深く浸透していました。特に『三宝絵詞』の「比叡山舎利会」には、女人結界の問題で比叡山に登れなかった女性の為に、唐招提寺や華山寺で舎利会が行われたことが記されています。実は比叡山の僧侶は十世紀後半から男性も女性も参加できる舎利会を行いはじめました<sup>⑨</sup>。『今昔物語集』や『栄華物語』などによれば、僧侶は山に登れない母親のために、比叡山の舎利の巡行を当時の都である平安京で始め、さらに踊りや音楽をその巡行に含むことによって極楽浄土の様子を再現したと思われました<sup>⑩</sup>。舎利会を行った僧侶は300人以上で、一目見ようと集まって来た人々は相当な数に上ったと考えられます<sup>⑪</sup>。

中世の往生伝にも舍利信仰と極楽往生の深い関連を暗示している記述がよく見られます。例えば、『本朝新修往生伝』（第9）には四天王寺の舎利に巡礼した蓮妙という尼が、西を向いて念仏を唱えながら、女性であっても往生できた

と述べられています<sup>22</sup>。このように十二世紀後半になると、男女限らず、舍利や塔の供養によって極楽往生や兜率天往生を得る事が出来るという概念は一般的になり、この事は真言僧覚禪の『覚禪鈔』などの文献にも見られます<sup>23</sup>。

有名な『七大寺巡礼私記』を書いたといわれている大江親通（?—1151）は舍利に深い関心を持ち、『一切設利羅集』も書きました<sup>24</sup>。『本朝新修往生伝』（第41）では『一切設利羅集』は『駄都抄』とされ、そこで編集の動機を説明しています<sup>25</sup>。これによると、当初釈迦の涅槃から千年を越える距離を長く感じた親通は、舍利を見る事によって釈迦の涅槃（死）の距離を越え、釈迦そのものと再び巡り会うことができるように思い、舍利粒や經典の舍利に関する説明や様々な舍利に見られる靈驗を現わす話しを集め始めた、とあります。こうして親通は舍利信仰に関する情報を収集し、膨大な『一切設利羅集』を書き残したのです。

また舍利は貴族社会の支配層によって一門の法要のためにも供えられたと考えられます。例えば、『玉葉』には九条兼実がその姉である皇嘉門院（1121-1181）と共に舍利講を行った、とあります。舍利講は毎度十九日に行われましたが、それは彼等の父である藤原忠通（1097-1164）の月命日だったからだと考えられます<sup>26</sup>。詳しくには述べられていませんが、その舍利講では『法華経』「如来寿量品」に表れる永遠である久遠釈迦についても説法・論議が行われたようです<sup>27</sup>。

## 結び

このように12世紀後半から九条家出身の皇嘉門院や兼実やその弟慈円は頻繁に舍利講を開き、仏舍利がその頃の宗教生活に極めて重要な位置を占めていたことがわかります。しかも、舍利講の文学的な面は「如来寿量品」の説法・論議に限られず、谷知子氏の指摘した通り<sup>28</sup>、舍利講は和歌を詠む場にもなりました。つまり、兼実や慈円は他の歌人達と一緒に舍利講の場で和歌を作っていたのです。兼実の子藤原良経の家集『秋篠月清集』の釈経部20首の中14首は舍利

講の際に詠まれました。しかも、『法華経』や中国天台開祖の智顛に指摘された一切存在を示す「十如是」についてよく詠まれていました。

このように、舍利講では『法華経』や久遠釈迦が強調される事に注目して頂きたいと思います。なぜなら、釈迦は永遠・不滅であるにもかかわらず、末法の時代という事で釈迦との距離を感じる人々にとっては、舍利はこの世界において釈迦を象徴し、その存在を感じることの出来る最たる物だったからではないでしょうか。しかも、慈円やその周りの歌人が極めて抽象的なテーマとして十如是を選んだ理由は、舍利も如是もそれぞれ最たる物・記号やすべての存在の実相として末法で見える社会や自然の無常を超えるからだったのではないのでしょうか。

鎌倉中期には周知の通り、明恵や貞慶などが「舍利講式」を書き残し、最近ではその講式に関する研究が仏教文学においては盛んになっています<sup>29</sup>。確かに、叡尊と僧侶達は鎌倉南都仏教の舍利信仰において中心的な人物として活躍しました。しかし、舍利信仰が盛んになったのは、鎌倉時代からでしょうか。今日、申しあげましたように、平安中期における記録や文学には舍利信仰が色濃く反映していたのです。しかも、鎌倉時代の舍利信仰の中心人物であった明恵や貞慶や叡尊は南都仏教の舍利伝統にも密教の舍利信仰にも関連していたので、舍利信仰のルーツや裏付けるコンテキストは平安時代又は奈良時代までに遡ると言っても過言ではありません。舍利と日本文学の関連は本生譚や壇越である王のモチーフに基づき、中世前期の複数のジャンルにまたがって描かれ、その基本モチーフは様々な書物や儀礼・儀式に改めて表現されました。さらに過去においては死のシンボルであった物が宝珠となって再び社会の表舞台に現れ、物語を紡ぐ語り手達にとっては様々な作品を産み出す豊かな泉となったのではないのでしょうか。

[注]

- ①有名な例はインドのサーンチーの塔である。
- ②『大正新脩大藏經』（高楠順次郎、渡邊海旭編、大正新脩大藏經刊行会、1924-1935）第25巻、no.1509、87頁下段-88頁下段。
- ③『大藏經』第16巻、no.665、450頁下段-453頁上段。
- ④『阿育王伝』（大藏經第五十巻、no.2042）103頁上段、110頁中段-111頁上段。
- ⑤敏達天皇13年9月、『日本古典文学大系』第68巻、148-149頁。
- ⑥渡部真弓『神道と日本仏教』（べりかん社、1991）31頁、45-46頁（注28）。
- ⑦景山春樹『舍利信仰—その研究と史料』（東京美術、1986）77頁。
- ⑧『続日本紀』文武4年3月10日。
- ⑨『大日本仏教全書』第113巻、119頁。
- ⑩『御請来目録』（『大藏經』第55巻、no.2161）参照。
- ⑪『大藏經』第77巻no.2431、411頁中段。
- ⑫同 411頁下段。
- ⑬関連の史料の数は多いが、主な作品は『御質抄』（『続群書類従』25下）、『後七日御修法部類』（同）、『永治二年真言院御修法記』（同）、『後七日諸日記』（金沢文庫280之5、影写本）、『後七日御修法記』（東京大学史料編纂所3014之65、影写本）、『御修法之記』（同2014之163、影写本）、『覚禅鈔』『後七日』（『大藏經 圖像部』第五巻、no.3022、653頁下段-681頁下段）である。
- ⑭釈迦の三十二相と数的に一致している事はいうまでもない。
- ⑮しかも、空海が室生山という聖地でその師恵果から授かった如意宝珠を埋めた事も伝えている（『大藏經』第77巻、no.2431、412頁下段 - 413頁下段）。
- ⑯弘法大師信仰に関しては橋本初子『中世東寺と弘法大師信仰』第2章、「大師請来仏舎利の信仰」（思文閣、1990）参照。
- ⑰馬淵和夫、小泉弘、今野達編『三宝絵 注好選』（新日本古典文学大系31、岩波書店、1997）8-14頁、32-35頁、44-49頁。
- ⑱日本思想大系7『往生伝 法華験記』（岩波書店、1974）520頁。
- ⑲『日本紀略』貞元2年（977）4月21日条参照。
- ⑳日本古典文学大系『栄華物語』巻第22「祇陀林寺舍利会」、150 - 152頁。『日本紀略』萬壽元年4月21日参照。
- ㉑横田隆志「舍利をめぐる法会と説話—『三宝絵』下巻「比叡舍利会」を読む」（『国語と国文学』第925号（2000年12月）、7-19頁参照。
- ㉒『往生伝 法華験記』685頁。
- ㉓『舍利』『大藏經』圖像部第5巻no.3022参照。
- ㉔鎌倉初期頃の山岸文庫古写本又は普通寺蔵本などがある。牧野和夫「『一切設利羅集』零本、影印・解説」（『年報 実践女子大学文学芸資料研究所』第7号、1988、119-153頁）、落合博志、「普通寺蔵『一切設利羅集』—影印並びに引書考証—」（『調査研究報告』第18号、1997、237-284頁）参照。
- ㉕第41、日本思想大系7『往生伝 法華験記』693-694頁。
- ㉖文治3年2月19日条（国書刊行会、1907）。
- ㉗同 治承元年10月19日条。
- ㉘谷知子「大機法院の舍利報恩会と和歌」（久保田淳編『論集 中世の文学』韻文篇 明治書院、



1994、240-261頁)、「新古今歌人の十如是の和歌について一九条家の舍利講を舞台として」(『語文』大阪大学国語国文学会編、第59輯、1992、12-20頁)、「九条家の舍利講と和歌」(『中世文学』第37号、1992、29-38頁)。

㊟講式研究会「貞慶舍利講式五題」(『大正大学総合仏教研究所年報』17、1995、172-252頁)参照。

#### \* 討議要旨

張哲俊氏は、舍利信仰は中国・韓国でも普遍的な信仰で、現在でも行われている、舍利には「珠」の舍利と「肉身」の舍利の二種類があり、また、思想面においても、信者の願いを叶える力がある、高僧の功德を示す、という二面がある、前者は迷信であり、仏教はこのような迷信を本来排除するものであり、全体として思想面ではそれほど重要ではないと思うがどうか、と尋ね、発表者は、舍利は経典においても、如意宝珠として、功德の証拠であると同時に信者の願いを叶える力を持つとされ、これは迷信ではなく仏教の中心的な思想である、『法苑珠林』には舍利の靈驗譚を集めた章があるくらいだ、しかし権力との関係、コミュニティの中で果たす役割など、まだまだ研究が進んでいない、功德と靈驗を分離して考えるのは、前近代のアジアにはなく、19世紀になってプロテスタント系の宣教師が持ち込んだものであろう、と答えた。

カンヤラニー・シタスワン氏は、タイ人はほとんど仏教徒で、幼い頃から舍利をお守りとして持っている、これは迷信ではなく信仰である、と発言し、発表者は、今回の発表の趣旨と合致する興味深い現象だ、と答えた。